

■エッセイ

私と神戸 [5]

ぼくは、 やっぱり 神戸っ子

妹尾河童

〈舞台美術家〉

絵／灘本唯人

かつて作家の水上勉さんと対談したとき、

「あなたは神戸生まれということを照れているけれど、生まれた街の明るさや、港町というリベラルさの中で育てられたという部分が、性格形成にかなりな影響をもたらしているんじゃないかな？ ぼくらがどうあがいても身につけられないものを、ごく自然に得ているというのは、羨ましいですね」

と真正面からいわれ、すごく戸惑ったことがある。

神戸生まれだと知った人は、たいいてい、「いいところですね」という。

その人の故郷が雪深い山の中で、交通も不便な土地であつたりすると、なんだか申し訳ないような気持ちになつて、「ええ、いい街ですよ」とは、なおいえない。

だから最近まで、自分の口から故郷の「神戸自慢」をしたことがなかったし、エッセイでも、「我が故郷」のたぐいを書いたことがない。

実は、この「神戸っ子」に執筆するのも初めてなのだ。そのぼくが書く気になったのは、還暦を迎えて、若干の心境の変化があつたからではないかと思う。

ぼくが神戸から東京へ出たのは三十九年前の二十一歳

のときであつた。戦争が終わつて六年後だったが、銀座を歩く人たちの足下が神戸と違つていたのに驚いた。神戸ではたとえボロでもほとんどの人が靴を履いていたのに、東京では下駄履きを多く見たからだ。でもその差を誰にもいわなかった。ぼくはそのときから、自分が神戸っ子であることを人に言えなくなったようだ。

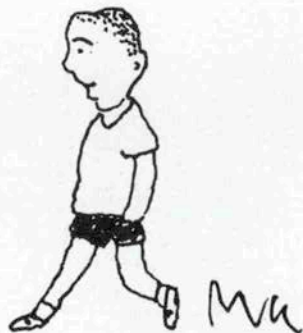
人物紹介のプロファイルに、出身地を神戸市と書かれたときと兵庫県と書かれたときとは、反応も違った。

太宰治が若い頃、自分が裕福な家庭に生まれたことを知られることを恥ずかしがり、小作農の貧しい家の生まれだと嘘をついていたが、なんだか分かる気がした。

今でも照れはするが、神戸に生まれ育つたことを人にも語れるようになった。神戸氣質を茶化した、からかえるようになったからだ。

神戸人の氣質は、オッチョコチョイだし、調子がよくいい加減などところがある。

これは近県と比べても際立っているように思う。ごく最近、『河童が覗いた旧山陽道』というテレビ番組の撮影で、下関から大阪まで七五三・七キロメートルを二十五日間かけて歩いてきた。その道中で、他の地域と神戸



という街との差を感じつつけた。

神戸が都市として急速に発展するのは明治期からである。以後大正時代にかけて、集まってきたのは、近県の二男、三男坊であった。長男は家を守るために、故郷を離れられなかったが、家や土地を継がない者は、新天地を求めて神戸へやって来たのだ。開拓時代のアメリカの西部にゴールドラッシュめがけて人が集まったように。

多くの親父やお袋も、広島県から出てきている。親父は紳士服の仕立てを習うために小僧になり、のちに洋服屋の店を持った。戦争の始まる前の客は、日本人だけではなく外人も多かった。でもガイジンという漠然とした

感じではなくアメリカ人のスミスさんとか、ドイツ人のハインリッヒさん、フランス人のアンドレさん、中国人の陳さんと、一人一人の顔があった。親父は、外国語はどの国の言葉も話せなかったが、商売上の不自由はしていなかったようだ。小学校低学年だった頃は、親父が洋服の仮縫いに出かけるとき、よくくっついて行った。珍しい洋菓子にありつけることが多かったからだ。

お袋は、お寺さんの孫であったのに、神戸に出てきてからキリスト教に改宗しクリスチャンになった。郷里では仰天し、「仏教徒がヤソに帰依した！」と大騒ぎになったらしい。後に親父も教会へ行くようになり、よくが最初に聴いた音楽は、家の中の賛美歌の合唱だった。

これは多くの家庭の特殊事情かもしれないが、父母がもし広島県から出ていなければ起こりえないことだ。若い二人が、神戸という新しい都市へやってきて異文化と遭遇した結果に他ならない。

「あかんかったらやり直したらええわ」

と、古い戒律に縛られない神戸特有の自由な雰囲気を感じとったからだろう。

神戸と似た土地は、西の長崎、東の横浜である。どちらも海の外に向かって窓を開けていた港町だ。

親父は三年前亡くなったが、八十三歳になるお袋は、「東京なんか行かんよ」と一人で神戸に住んでいる。

よくは、両親の気質と、神戸という風土の両方から、好奇心とオツコヨコチョイな気質を、色濃く受け継いでした。そんな自分を持てあましながら、

「やっぱり、神戸っ子やからなあ……」

と、苦笑しながらあきらめている。



▲筆者紹介

昭和4年神戸市生。グラフィック・デザイナー。などを経て、同29年、独学で無台美術家としてデビュー。以来、演劇・オペラなどの無台美術をはじめ、映像デザインの分野においても活躍中。また細密イラスト入りの著書「河童が覗いた」シリーズでエッセイストとしても知られる。



□ トランペット片手にブラジル一人歩き△27▽

ユダヤとトルコ

絵と文 右近 雅夫 △在ブラジル・サンパウロ▽

が合った時ほど嬉しい事はない。

僕等のバンドのトロンボーン奏者の Fernando はレバノンの二世だが僕等は彼を「トルコ」というニック・ネームで呼んでいる。ある日、OPUS のステージの合い間に、「マサオ、ユダヤ人とトルコ人が母親を売りに出したが両者の違いを知ってるかい？」とピアーダ（ジョーク）の得意な彼がニヤニヤしながら僕に尋ねた。僕が返答に戸惑っているのと、「ユダヤは母親を届けるが、トルコは金だけ受け取って雲隠れしてしまうんだ……。」と言ってフェルナンドは腹をかかえて笑った。

中近東ではイスラエルと近隣アラブ諸国の間で戦火の絶え間が無いが、サンパウロに住んでいるといかにして彼等が殺戮の斗争をくり返すのか理解に窮する。僕の近所隣りやアミゴの間だけでもユダヤ系、アラブ系は数えきれなく、それもお互いに仲良く共存しているからだ。例えば僕等のバンドを例にとってもフェルナンドはアラブ、クラリネットのフィリップ・アメイェはユダヤ系フランス人、ピアニストのリカルドはブラジル人だが嫁さんはフランス系のユダヤといった具合だ。だから彼等とデキシーの即興演奏をしてピタリと息

が合った時ほど嬉しい事はない。
フィリップは最近僕等のレギュラーに加わってまだ間がない。前にいたクラリネット奏者がプロでデキシーをやっていたのは商売にならんからと言って辞めた後、仲間が、「彼ならマサオと同じように自分で商売やっているので時間的制約もなくて良いだろう……。」と言って連れて来たのだが、僕は彼を一目見た途端アツと驚いた。「どこかで見たことのある奴や?」と思い出したら、何と二十五、六年前、マジック・インクの工場がまだ創業期にサインペンを沢山納入して集金するのに往生した相手だった。「何だお前、いつからクラリネットなんか吹いとるんか?世間は全く狭いもんや……。」と言って僕ははにかむ彼の肩を叩いて握手した。横でフェルナンドやリカルドが、何だ前から知り合いだったのか?と狐につままれたような顔をして見ていたが、僕は昔のことは何も言わなかった。——彼もあの当時は商売を始めた頃で、きっと苦労していたのだろう。

フィリップは他のアマチュア・グループでデキシーを吹いていたのだがレパートリーに乏しく、新しい曲を教えてくれと言ってはそれから毎週のように家にやって来るようになった。僕より十才年

PAZ no mundo
através do "Dixie"!



下の彼はフランスにいた頃からジャズが好きでクラリネットを吹いていたが楽譜がほとんど読めず、和音の進行だけに頼って演奏するので、彼のパートをいちいち手に取るように教え込まなければならぬのである。楽器のケースやら旧式のテープレコーダー、それにマイクやカセットのテープが一杯つまったバッグを下げて、会社の帰途、丁度夕食前にやって来るので、こちらは迷惑至極だが、本人はレパートリーを一曲でも増やそうと真剣そのものである。

彼はブルース等を演奏する時、楽器を水平よりやや高く持ち上げ、目を閉じて哀愁たつぷりのフイーリングで吹くので、僕は彼の演奏場面をパステルで描いたのを二枚、此の前 OPUS でやった個展に出品した。彼の表情がうまく描け意外に良く出来た大作? だったので、売らずに置こうと思つてその二点には最高の値を付けておいた。結局、その二点は売れ残ったのだが、個展が終つてから家にやって来たフィリップが、「僕の画をもらうていこう……。」と言つて買つて行つた。

もう数年前のことだが、うちの息子にピアノを習わせようとボッサ・ノヴァで有名なジンボ・トリオが経営する音楽教室にやっていたことが

あった。毎週一回、学校がひけてから家内がタクシーで送り迎えしていたのだが、そこで知り合つた親切な婦人が、「どうせ私も息子を送って行くのだから……。」と言つて、家内とうちの息子を自分のベルアで送り迎えしてくれるようになった。こうしてレナタとファビオの親子はうちの家内と息子の大的仲良しとなり、レッスンの帰途一緒にショッピングしたりお互いの家に遊びに行くようになった。

レナタの両親は第二次大戦勃発直前、ドイツから逃げてきたユダヤ人で、彼女は一人娘だが両親の反対を押し切つてブラジル人と結婚したので、同じような境遇にある我々夫婦にとっても同情的である。ブラジルの上流社会では娘が十五才になると、「成人式」といつてクラブ等を借り切つてボーイフレンドを招いて舞踏会をする習慣がある。うちの息子も最近同じクラスメイトの女の子達から招待されることが多くなり、ネクタイに背広の上下の正装で行かねばならず、そのたびごとに貸衣裳屋に借りに行かなければならなかった。家内からその話を聞いたレナタが、「そんならうちのファビオに新調した背広がもう入らなくなったので、マサオズイニョにあげよう……。」と言つて持つて来てくれた。「お金を払わさせて頂かなくて……。」という家内に、「ユダヤ人はケチだと言うけど私は落第組ね……。」とはほえむレナタを見て、ユダヤやトルコという世間ではあまり良く言われないが、こんなに心のやさしい人もいるのかと思つた。そういえば僕の個展の前日、景気付けにといつてわざわざ画を買いに来てくれたフェルナンドもトルコというニック・ネームだ。



子供の頃に神戸へ遊びに来ていたという作家の宮尾登美子さん。最近では仕事でしか来る機会がなくなったそうです。神戸ポートピアホテルで行う講演のために久しぶりに神戸を訪れた宮尾さんに懐かしい古き良き神戸の思い出を語っていただきました。

私が小学校の低学年の頃、昭和でいえば10年、11年頃、父が福原で仕事の取りひきをしていたので、よく神戸へついで行きました。当時、私たちは高知に住んでいて、京阪神への唯一の交通機関は船でした。

朝の6時に神戸港に着くのですが、夏場なんかはもうずいぶん明るくて、元町あたりで遊んでいました。海老の天ぷらを初めて食べたのも神戸、確かシャベットもそうでした。とてもおいしいパンもそろってました。だから元町は非常に珍しいものがたくさんあるところという印象がありますね。

でもずいぶん神戸は変わりましたね。以前、NHKの「歴史誕生」の番組で、平清盛が港を改修したはなしがでてきたのですが、その時に現在のポートアイランドの図を見て、びっくりしたことを覚えています。

今はもうないのですが、トア・ホテルが坂の上に建っていて、とても眺めがいいところでした。オリエンタル

●珈琲のみながら…

戦前の神戸で よく遊んだの

宮尾 登美子
さん
〈作家〉

ホテルにも泊ったことがあります。古い面影を残すいいホテルですね。

私の著書を熱心に読んでくださる読者の方も神戸にたくさんいますし、とても好きなところなのですが、やはり戦前の神戸の方がいいなと思いますね。

(神戸ポートピアホテルにて)





「夜明けの整列」
(油絵)

犬童 徹・作
二紀会委員
大阪教育大学教育学部教授

競馬場のパドック（下見所）の一場面です。馬に乗る前の整列ですが、レースに向かう一瞬の緊張感に魅力を感じ、絵にしてみました。好きな、夜明けの舞台で。

(柿沼産婦人科に展示 8/1～8/31)

芦屋 柿沼産婦人科

★健保適用 産婦人科・内科(女性専科)



阪神芦屋駅北へ1分・芦屋警察署東隣り
☎(0797) 31-1234 (FAX兼用)

当GALLERYに掲載ご希望の方は月刊神戸っ子まで御連絡下さい。

あなたも挑戦してみませんか！

ビデオで綴るふるさと兵庫

テーマ 「わたしの兵庫」

兵庫県では、神戸市民と兵庫県政との関わりを身近に感じようビデオ作品を募集しています。

日頃区役所や公民館などを通して、神戸市政を身近に感じても、県政との関わりを理解している人は少ないのではないのでしょうか。しかしいろいろな場面で、県の仕事も神戸市民の暮らしと深く関わっています。県立病院や美術館、生活科学センターなどの活動や県主催の数々のイベントがそれです。また日常の地域活動のなかで感じられる県政への期待や要望などでも結構です。そんな兵庫県と神戸市民との関わりをビデオに納め、一本の作品に仕上げて応募して下さい。

審査の上、特選(賞金30万円、副賞ビデオカメラ)1点の他、優秀賞、奨励賞、特別賞を選びます。応募期限は11月1日まで。詳しくは、兵庫県民サービスセンター☎078-252-1001までお問い合わせ下さい。皆さんのユニークな作品をお待ちしております。

花博と京阪神を

徹底ガイド！

EXPO '90

花の万博と京阪神ガイド

全国主要書店にて好評発売中

●A 5判変形 334頁 定価1,000円(税込み)

●表紙/サトウサンペイ

●花の万博ガイド/パビリオン紹介他

●タウンガイド/大阪・神戸・京都・奈良

編集/月刊オール関西 発行/コミュニティサービス

井植文化賞発表

戦後、日本の復興と繁栄に大きな足跡を残した三洋電機株式会社の創設者、故井植歳男氏の遺志によって昭和44年11月に設立された財団法人「井植記念会」。同会では兵庫県在住又は兵庫県にゆかりの深い人の中から、めざましい活躍をされた人を受賞の対象としてその功績を讃えるとともに、地域社会のより一層の発展に寄与したいと考え、この「井植文化賞」を昭和52年より設定しました。今回で第14回を数え、各分野の評論家、学識経験者などで部門ごとに構成される選考委員会によって、6部門の受賞者が次の通り決定しました。受賞者には副賞として賞金・個人30万円、団体50万円、さらにライオンのブロンズ像が贈られます。

□国際交流部門

CHIC (Community House & Information Centre)

△代表者 ジョアン・メインソ



アメリカ・デラウェア州出身。コーネル大学、ペンシルバニア大学で看護学、公衆衛生学を修める。昭和61年に日本へ。CHICでは日本にくる外国人が居住するのを手助けすることを第一にし、加えて日本での生活水準を向上させるのを目的とする。また、外国人に対するオリエンテーションを行なっている。

□報道出版部門

「火輪の海」取材スタッツ



橋田 光雄
服部 孝司
林 芳郎

神戸新聞に昭和64年1月1日～平成2年3月2日まで連載された「火輪の海」は、松方幸次郎の足跡と謎のコレクションを追って、国内外に取材、長期にわたり広く読者の共感を得た。上下巻二冊に収録、下巻7月刊行。



□報道出版部門

「メダルは笑顔に輝いた」NHK神戸放送局制作スタッツ



構成 海野 仁毅 写真左 音声 川本 正史
撮影 浅井 裕 写真右 制作 田中 実

「メダルは笑顔に輝いた」は、平成元年9月に開催のフエスピック神戸大会に出場した二選手を中心に、密着取材をしたドキュメンタリー。平成元年10月10日全国放送。モニター評も極めて良く、同年12月9日障害者の日に、音声多重で再放送した。

第14回

井植記念会主催

□文化芸術部門 菅沼 潤

△演出家△



昭和29年宝塚歌劇団文芸演出部に入団、宝塚歌劇のミュージカル、ショー等多数作・演出する。又関西歌劇団・二期会合同公演「仮面舞踏会」、吹田市メイシアター柿落しに近松門左衛門の作品をミュージカル化、東京国立劇場「孤宴」台本等、幅広く、そして内容の濃い活動を精力的にこなす。現在宝塚市在住。

□科学技術部門 安田 武司

△神戸大学農学部助教授 農学博士△



昭和41年京都大学農学部農芸化学科卒業。46年同大学大学院農学研究科修了後、同大学助手。55年神戸大学に助教授として赴任。専門は熱帯有用植物学。熱帯植物を材料として組織培養法による大量増殖と改良を試み、コーヒーについては大量苗生産法を確立した。また、企業への技術指導も行い、高い評価を受けている。

□社会福祉部門 神戸いのちの電話

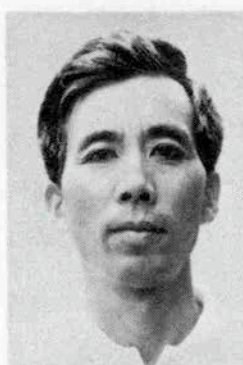
△代表 今井 鎮雄△



昭和56年6月に開設。孤独の中にあって、時には精神的危機に直面し、助けと励ましを求めている一人一人と、電話で、隣友として対話することによって、その危機を克服し、その人自身の自由に於て新たに生きる勇氣を持つに至ることを目的としたボランティア運動。

□地域活動部門 松島 興治郎

△豊岡市教育委員会
△コウノトリ飼育員△



昭和40年1月、県立のコウノトリ人工飼育場の建設と同時に、専属飼育員としてコウノトリの飼育・増殖のためにひたむきな努力研究を重ねてきた。永年にわたる生息・習性研究、飼育技術の工夫・研究の結果、平成元年5月、待望のヒナが誕生し、7月には2羽が巣立った。今年4月に8羽のヒナが誕生、うち5羽が成育中。

●第14回井植文化賞

国際交流部門

21Cにむけて神戸を
国際都市に
CHIC

コミュニティハウスアンド
インフォメーションセンター



★選考委員

新野 幸次郎

＜神戸大学学長＞

長島 隆

＜六甲牧場取締役会長＞

宇都宮 浩

＜兵庫県海外協会常任理事＞

わが国には、外国人に対する便宜供与という点で不備な点が多い。この不備を補うために、神戸の外国人達は、日本人ボランティアの協力も得て、一九七七年にCHIC (Community House & Information Centre) を組織され今日に至っている。

それはひとり神戸だけでなく関西に新しく住まれるようになった外国人の方々にその必要に応じて色々な情報を提供するとともに、古くからの居住者との情報交換などを目的として設立された。

最初は、ユニオン教会のアーサー・ギャンプリン牧師のご援助でスタートしたが、現在では二人の有給職員と二十人のボランティアとでその活動が続けられている。

その主な仕事は電話相談と面談および“Living in Kobe”という案内書や“News Letter”の発行であり、いまでは外国人居住者に不可欠の存在となっている。

一つの都市が外国人にとっても住みやすい都市になるためには色々な努力がなされなければならない。それはいうまでもなくそこに住むすべての人達が自覚的にしなければならぬことであるがCHICは自らの力で今日まで大きな成果をあげてこられた。今後一層の発展を祈りたい。

△新野幸次郎▽

■選考経過

第4回目を迎えた「国際交流部門」だが、神戸だけでなく日本が「国際交流」という問題を提起されている現在、まさにタイムリーな賞である。

1980年に神戸女学院において設立されたアルカディア協会は同校のコーラス、オーケストラの活動を中心とし、西ドイツ、イタリア、シンガポールなどへ演奏旅行し、その活動はめざましい。

また、移情交友の会は、移情閣を拠点として日常的な文化活動を通じて、日中間並びに国際間の文化交流を増進し会員相互の親睦を図ることを目的としている。

今年の受賞はジョアン・メイソンさんを代表世話人とする「コミュニティハウスアンドインフォメーションセンター」に贈られることになった。特に外国人の日本での生活における質問・要求等の補助にあたることを目的としており、活動内容は旅行、交通機関、グッドウィルガイズ、インターナショナルに関する案内を行なっている。

●受賞者メモリアル

- 1、加藤一郎（神戸日独協会名誉会長▽神戸大学名誉教授▽）
- 2、神戸日本赤十字協会
- 3、神戸YMCA

●第14回井植文化賞

科学技術部門

組織細胞培養による
熱帯資源植物体の再生と
その機構について研究

安田 武 司



★選考委員

本間 守男

＜神戸大学医学部長＞

松本 治彌

＜神戸大学工学部長＞

名武 昌人

＜神戸大学農学部長＞

飯尾 理郎

＜神戸新聞社編集局生活部長＞

植物組織細胞培養は、バイオテクノロジーにおける有用な手法として利用されている。植物培養細胞の大きな特徴は、培養細胞（又は組織）から元の植物体が復元できることであり、また培養細胞そのものも有用物質の生産に利用される。しかし、植物種によりそれらの培養法はかなり異なる。

安田武司助教授は、それまで殆んど手がつけられていなかった熱帯植物（コーヒー、カカオ、インド型イネ、サトウキビなど）を材料として組織培養法による大量増殖と改良を試みた。特にコーヒーについては、成木の若い葉から、従来とは異なる方法で体細胞胚の形成法を見だし、大量苗生産法を確立した。現在、インドネシアやジャマイカ（UCC農場）の優良樹種にこの方法が応用されている。また、裸の細胞であるプロトプラストから胚形成および植物体を復元することに成功し、細胞工学的利用への道を開いた。

一方、これらの成果をもとにコーヒー、インド型イネを用いて、植物培養細胞からの胚形成、植物体再生の機構について基礎的な研究を精力的に進めている。

安田助教授はまた、熱帯に多い高塩環境に耐性をもつ作物の育成を目的として、海岸植物からの耐塩性細胞の選抜、細胞融合による作物への耐塩性の導入、耐塩性機構の解明などについて研究を進めている。

△名武昌人△

■選考経過

今年の科学技術部門は例年に比べ候補者は少なく、工学部系から沖村孝氏と安田丑作氏、農学部系からは安田武司氏の計3人の名前があがった。なお、医学部系の候補者はなかった。

土木工学の沖村孝氏はがけくずれを数値的に分析し予測する手法を提案したことで高い評価を受けている。また都市計画を専門とする安田丑作氏は学術面だけでなく兵庫県下における都市デザインにかかわる計画・構想に参画し、実践面での業績も多い。

最後に候補にあがった農学部系の安田武司氏は、組織培養を用いて熱帯資源植物体の再生とその機構の究明に取り組んでおり、氏の指導を受ける企業も数多い。

3氏とも優秀はつけ難かったが企業への貢献度が大きいという意味で安田武司氏に決定した。

- △受賞者メモリアル△
1. 櫻井春輔＜岩盤力学＞
 2. 杉山武敏＜遺伝子学＞
 3. 土田広信＜農芸化学＞
 4. 嶋田勝次＜都市計画・建築学＞
 5. 沢村誠志＜障害者の社会＞
 6. 安藤四一＜音響の研究＞
 7. 辻莊一＜家畜育種学＞
 8. 西塚泰美＜生理学＞
 9. 中岡睦雄＜パワーエレクトロニクス＞
 10. 清水晃＜微生物生態学＞
 11. 岡田安弘＜生理学＞
 12. 賀谷信幸＜計測工学＞
 13. 田中千賀子＜薬理学＞

●第14回井植文化賞
報道出版部門

『火輪の海』上・下巻

神戸新聞社／編

『メダルは笑顔に輝いた』

NHK神戸放送局／制作



★選考委員

山崎 進

<ラジオ関西代表取締役>

西 昭道

<NHK神戸放送局長>

三木 康弘

<神戸新聞社論説委員長>

活字と映像という異なるメディアを駆使して作られた作品を、同一のジャンルとして順位を付けることには無理があるという結論に達し、2作品が並列で受賞することに決定した。

『火輪の海』上下巻は、松方コレクションの主として知られる松方幸次郎の生涯を、神戸市との深いかわりを通して描いた伝記風の物語りである。神戸市制が100周年を迎えたのを機に、神戸新聞社が「幻のコレクション」とも呼ばれる松方コレクションの集大成を、松方のゆかりの地・神戸で開催することになり、それにちなんで約1年間の新聞連載を試みたが、その集積を刊行したものである。

『メダルは笑顔に輝いた』は、フェスピック神戸大会に出場した世界各国の障害者選手のうち、オーストラリアと日本の女性選手を中心に、密着取材を行ってまとめた上げたドキュメンタリーである。

両足を失ったオーストラリアの水泳選手、全盲に近い日本のランナー共にうら若い女性が家族の暖かい励ましと協力のもとに懸命に練習と取り組む姿は、見る者に深い感動を与え、映像メディアの特質をいかに発揮した作品である。

△山崎 進▽

■選考経過

候補作が多く捨て難い作品が出揃い、その中でジャーナルに「時」を焦点と捉える事にポイントが置かれた。

選考に残った作品は、「99冊の航海記」（蜘蛛出版）「富田碎花・資料目録」（即位の礼と大嘗祭）（生田神社編集）「花輪の海」（神戸新聞社）「メダルは笑顔に輝いた」（NHK神戸放送局）。

完結した作品を基準にと、最終的に、60年から自費出版を続け、その詩集、歌集、随筆等を集大成した100冊目の本「99冊の航海記」も、地域に根付いた出版活動として高く評価されたが、「メダル」と「花輪」の二点が優秀をつけ難い状況となった。

教材にも使われ、副音声に視力障害者の為にナレーションが入れる等報道メディアの特質を発揮した作品、一方神戸新聞に一年間連載され松方コレクション展の成功の一翼を担った作品として、二作品受賞が決定した。

●受賞者メモリアル

1. 「あなたの愛の手を」
2. 神戸空襲を記録する会
3. 落合重信
4. 春木一夫
5. 「兵庫探検」「兵庫史を歩く」
6. 「神戸の中堅150社」
7. 神戸新聞波路総局「波路祭事記」
8. 「神戸からこんにちには」「天津からこんにちには」
9. 神栄越郷
10. 「私たちの昭和史」
11. 「バルモア病院日記」・スタジオ TODAY ホットに語ろう!
12. 「収録港湾労働神戸港」
13. 「ひょうご経済人」

●第14回井植文化賞
地域活動部門

コウノトリと共に歩む

松島興治郎



★選考委員

小笠原 暁

＜芦屋大学教授＞

長島 晴雄

＜前・神戸新聞監査役＞

武衛 晴雄

＜神地崎工業顧問＞

「コウノトリのひな誕生」というニュースは、昨年五月自然保護に関心を持つ人々を感激させた。絶滅の危機にあるコウノトリを保護しようとして、豊岡市に飼育場が設けられ、人工飼育が始まったのが昭和四十年。

松島さんはそれ以来、専属飼育員としてコウノトリの飼育、増殖一筋に生きてきた。豊岡高校時代からコウノトリに強い関心を持ち、卒業後もその熱心さが買われて専属飼育員になった。

しかしそれから苦難の連続だった。相次ぐコウノトリの死もあった。やっとソ連から贈られた六羽から、昨年のひな誕生になった。

一人ぼっちで飼育場に泊り込み、一週間近くも人の姿を見ないこともたびたびあったという。ひな誕生の陰にはこんな長く地味な苦勞がある。

もちろんコウノトリの保護には、昭和三十年以来続く「但馬コウノトリ保存会」が果たした役割は大きい。

同時にその中の松島さんの地味な功績の大きさも、だれもが認めるどころ。今回は、地域ぐるみの活動の核になっている個人に光を当てることにした。

まだまだ苦難の道は続くだろう。飼育二十五年の松島さんのいつそうのがんばりを期待します。

△長島晴雄△

■選考経過

最初に名前が挙ったのが但馬コウノトリ保存会。平成元年五月に孵化が成功、また神戸新聞総合出版センターより写真集「コウノトリ誕生」も発行され、まさにコウノトリ元年といふべき躍進ぶりが注目を集めた。

出石町の齊藤隆夫記念館・静思堂の静思塾や中西通さんが遺した笹山町の丹波古陶館、但馬文化協会美術関係の書籍など今回は特に県の山岳地域の活動が候補に挙げた。

様々な協議の結果、やはり長年に渡る活動と地元住民も参加して、地域に根づいた運動として評価が高い但馬コウノトリ保存会の受賞が決定した。本来、この地域活動部門は団体が対象であったが、飼育係の松島興治郎さんの努力あってこそ孵化が成功したという点と今後の同部門の選考基準の枠を広げる意味も含めて初の個人受賞となった。

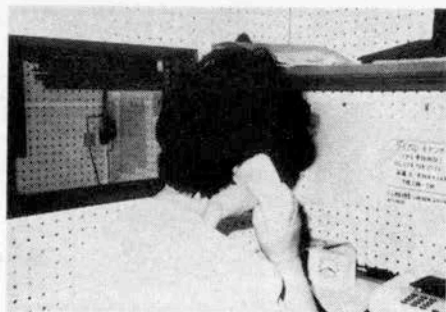
- 受賞者メモリアル
1. 城崎郡日高町
 2. 明石市民のコミュニティ活動
 3. 一宮町文化協会
 4. 尼崎郷土史研究会
 5. 尻池南部地区自治連合協議会
 6. 月刊神戸っ子
 7. 明延ふるさとづくりの会
 8. KICS
 9. 丸山地区住民自治協議会
 10. アンドレ・ブリューネ
 11. 神戸新聞文化センター
 12. 尼崎市演劇連絡協議会
 13. ブナを植える会

●第14回井植文化賞
社会福祉部門

“こころのダイヤル”

“こころの110番”

「神戸 いのちの電話」



★選考委員

津田 元

＜神戸新聞社論説副委員長＞

野上 文夫

＜兵庫県社会福祉協議会
企画情報センター所長＞

橋本 明

＜家庭養護促進協会
事務局長＞

さまざまな人々の悩みに電話を通して耳を傾け、援助していかうと「神戸いのちの電話」が活動を始めてから今年で10年めになる。人もお金もない、まったくのゼロからのスタートだったが、神戸YMCAの全面的な支援でこの10年間休むことなく活動は続けられ、10万人を超える人たちの相談に応じてきた。

活動は、日曜、祝祭日を除く午前8時～午後9時で約200人の訓練を受けたボランティアの相談員が交替で電話を受けている。昨年の一年間では約4万4千件の電話がかかり、1万3千件（あとは留守番、間違い電話等）に回答できた。受信の年齢別では20代男性が圧倒的に多く、次いで20代女性、10代男性、30代女、男で、問題別では性に関する相談が突出し、次ぎに男女、家族、夫婦、人生の問題となっている。また、自殺念慮も278件報告されている。

「いのちの電話」の特色の一つは、他の電話相談とは異なって、相談員は専門家ではなく素人であり、ボランティアによる市民活動であるという点である。いのちの電話のルーツであるロンドンのサマリタンズのモットーは「友達になること」である。現代の孤独な人々に隣人として耳を傾ける活動はこれからますます必要になってくるだろう。

相談電話 〇七八一六四二＝11100

△橋本 明▽

■選考経過

今回は「ほほえみグループ」「神戸いのちの電話」が昨年に引き続き候補にあり、新たに「アムネスティインターナショナル」「えんぴつの家」「兵庫県里親会連合会」「あゆみ教室」が加わり選考が行われた。

「ほほえみグループ」は在宅福祉のボランティア活動、「アムネスティインターナショナル」は人権問題、「えんぴつの家」は知恵遅れの人たちの小規模作業所での活動、「あゆみ教室」は就学猶予の子供に義務教育の学習を受けさせる活動、そして「兵庫県里親会連合会」は35年にわたる地道な里親活動がそれぞれ評価された。今回受賞となった「神戸いのちの電話」は現代の孤独な人々のための「こころのダイヤル」として、助けあい、ともに成長していくという活動内容が選考委員の多大な評価を得た。

1. 福来四郎
2. 小畑延子
3. 神戸市立友生養護学校
4. 春本幸子
5. 富永繁男
6. 神戸大学看護ボランティア
7. 米田寛子
8. 神戸東部地域入浴サービス実施委員会
9. 涌井安太郎
10. 山本博繁
11. エリア会、OHPこうべ
12. 誕生日ありがとう運動
13. 兵庫ボランティア協会

△受賞者メモリアル▽

●第14回井植文化賞
文化芸術部門

幅広い分野で
演出家として活躍

菅 沼 潤



★選考委員

柴田 仁

<音楽評論家>

小石 忠男

<音楽評論家>

出谷 啓

<音楽評論家>

菅沼潤さんは宝塚歌劇の演出家として、既に長く活躍を続けて来られたベテランである。その彼がオペラの演出に進出したのも、もう随分以前のことである。関西歌劇団を中心に、創作オペラ、名作オペラを問わず、精力的に舞台造りに専念されて来た。印象に残るものだけを列挙しても、「リゴレット」、「ボセイドン・仮面祭」、「地獄変」があり、最近も大阪音楽大学のカレッジ・オペラ・ハウスでの、「ファルスタフ」上演などでも、手堅く安定した演出ぶりであり、我々を楽しませてくれたばかりである。

菅沼さんの演出は、常に見る立場を考慮した楽しい舞台に特色がある。いわゆる演出家の独断がなく、分かりやすい演出といえる。しかも永年の舞台造りから得た、ノウハウが常に生かされていて、オペラを見る楽しさと、安定感があるのが素晴らしい。気を銜い鬼面人を驚かすところがなく、オーソドックスそのものののだ。こうした本格派の演出家が、賞を受けるのは少し遅すぎたという感もなくはない。独断と偏見に陥ることなく、常にオーソドックスな演出を目指す菅沼さんは、実際オペラの振興のためには、本当になくてはならない人なのである。

△出谷 啓△

■選考経過

今年の文化芸術部門は△音楽△界を対象に選考会を開いた。兵庫県下在住・在籍の音楽家となると、受賞候補者が数少なく、選考時自体は1時間程だったが、候補者のレベルは高く内容の濃いものとなった。

団体として明石市民オペラ、神戸中央合唱団が挙げられた。個人では坂本環氏（声楽家）、金沢益孝氏（ピアニスト）、中村茂隆氏（作曲家）、コンサートホールの設計で著名な前川純一氏（建築音響学）らが候補者に。

最終的には、元宝塚歌劇団演出家、関西歌劇団演出家で、オペラはもちろん、能・歌舞伎等の幅広い分野の演出を手がけ、関西在住演出家では、第一人者である菅沼潤氏に決定した。

- △受賞者メモリアル△
1. 河口龍夫<現代美術>
 2. 山田幸平<作家>
 3. 横井和子<ピアニスト>
 4. 荒木高子<陶芸家>
 5. 多田智満子<詩人>
 6. 田原富子<ピアニスト>
 7. 昇外義<画家>
 8. 安水聡和<詩人>
 9. 延原武春<指揮者>
 10. 山沢栄子<写真家>
 11. 神戸麗ライオンズクラブ
 12. 青木はるみ<詩人>
 13. 今竹七郎<グラフィックデザイナー>

英語をマスターし、相互理解を深めよう

エーバ・ハード・フランソア・バウマン 〈ドイツ連邦共和国総領事〉

ルネ・ベレ 〈フランス総領事〉

司会・小泉美喜子

〈本誌編集長〉

本誌では年に一度、国際交流をテーマとした特集を組んでいるが、今回はドイツ連邦共和国総領事バウマンさんとフランス総領事ベレさんに神戸に関する様々なお話を伺った。

★文化交流も言葉がまず肝心

——お2人が来日されてから、もうどれ位になられますか。

バウマン 私は7年になります。

ベレ 私は2年目。でも再来日なんです。最初は7年から4年間、東京に居たんです。その折、2カ月間だけ昔屋の日本人家族と同居していました。

バウマン 道理で日本語が上手い訳だ(笑)。私は通訳なしではまだ不十分ですね。よく表現できません。

——いいえお上手ですよ。それでは、来日前に予想されていた神戸と実際にご自分の目でご覧になった神戸の

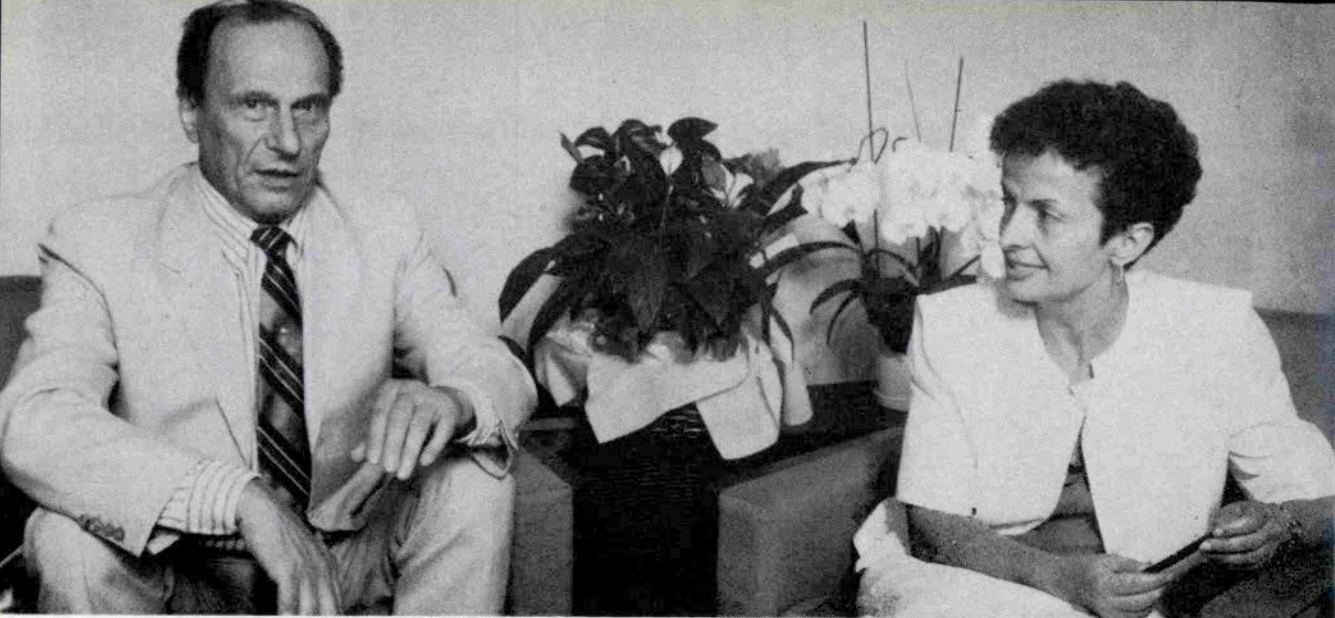
姿との違いあたりからお話し下さい。

バウマン 私は神戸で働き、神戸に住んでいますし、大好きな街ですね。大阪に比べると人間的なんです。来日前から概念として「神戸は国際的な街だ」と思っていたんですが、実際にその通りでした。

ベレ 一口に関西と言っても神戸、大阪、京都の3都市はそれぞれ特色があって、全然違っていましたね。神戸は外国人が多く住んでいる街、大阪は商人の街、京都は歴史的な街といったところかしらね。神戸と大阪はハイカラで似たところも少しはあるけれど、京都はまた異質ですね。

バウマン 京都は傲慢な街(笑)。

ベレ 他はさておき(笑)、神戸について言えば、12年前前まで眠っていた状態が貝原県知事さん、宮崎前市長さんらのお陰で急に発展しましたね。今や西日本のファッションの発進地ですものね。ビルもどんどん立ったし。



旧知の仲のパウマンさん（左）とベレさんだけに大いに会話が弾んだ

——17年前にファッション都市宣言をして以来、ようやく栄えてきたというところで。

パウマン 服を買うために京都、大阪からお客さんが神戸へやって来るというのは、その立証ですよ。一番エレガントな街です。

ベレ 昨秋開かれたWFF'89（ワールドファッションフェア）もスペインをテーマとして、大成功しましたね。

——今年はウィーンがテーマです。

パウマン オーストリアの?! それは楽しみです。

ベレ お世辞ではなくて、今や神戸はイタリアのミラノと肩を並べるだけのファッションの実力を身に付けていると思いますよ。それとファッショントウンの設置ですね。山を切り拓いて街を作る。その山の土を海に埋めて人工島を作る。このアイディアは素晴らしいわ。こうして出来たポर्टアイランドにファッションメーカーを集合させた。

パウマン 六甲アイランドも完成しましたね。街づくりはこれからですが、また面白いことをやってほしいものです。

ベレ 空港もできるんでしょ？

パウマン それはポर्टアイランドの沖の方になるみたいですよ。名称は神戸空港ですね？

——そうなると思います。

パウマン 成田や大阪よりもいいイメージがあるね（笑）
ベレ やっぱ「神戸」という言葉の響きがいいのよね。神戸とつくだけで、価値は上がります（笑）。

——ほめていただいてばかりで却って恐縮してしまいます（笑）。お二人とも神戸にいい印象を持ってもらえるように嬉しく思います。悪い点、こうすればもっと良くなるといった点もお聞かせ願えませんか。

パウマン これは神戸に限ったことではないのですが、京都や大阪もひっくるめて関西の人達は英語を良くしゃべれないと思います。同じ雑誌の取材を受けても、東京の出版社の人達は英語を上手く話せます。外国人が東京



チャーミングなベレさん

に多いとかいうことを考慮に入れたとしても、これは問題だと思えますね。ですから、もっと語学力をつけることが第一ですよ、国際化を目指す以上は。

ベレ そうね。我々が東京の官公庁に行っても、絶対に言葉で困ることはなかったわね。フランス語の上手い人が出てきてくれました。

パウマン 何といっても言葉でコミュニケーションを図らないとね。ヨーロッパでは、ほとんどの国で10才から語学のマスターを考えますから、これは文部省の問題ですから「神戸っ子」さんに言っても仕方ないかもしれないけどね。

—— 私達も本当に勉強しなければいけないと思います。ベレ 私はドイツ語をよくしゃべれないんです。これは残念なことですよ。

パウマン 全く(笑)。片言でもいいから言葉をしゃべること。これは本当に大切なことですよ。私も日本語には苦労しました。いや、今でも苦労しているけど(笑)。

どうにか自分の言いたいことを相手に伝えることができ、相手の言っていることがわかるようになったのは、どんな日本人の中に入っていたからだと言ったのには、思いますね。誰だって恥はかきたくないけれど、言葉の違う国に行って、その国の言葉を憶えようと思えば勇気を出してぶつかっていかないとね。日本人は特にシャイな人が多いから、決断がいると思うけれど。

ベレ 本当。シャイな人が多いわよね。恥ずかしいというより、奥床しいという感じの。

パウマン うん。だから今日の対談のテーマは神戸の国際交流についてということだけど、まず英語をマスターすることを考えたらいと思うな。英語を話せたら、ヨーロッパでも、アフリカでも、南米でも、どこへ行っても困ることはまずありません。

—— 文化面の交流においても英語の役割りは大きいですね。

ベレ 日本人に限らず世界中からフランスへ、絵とか、



来日以来7年のパウマンさん

写真とか、勉強に来る人は多いんですが、言葉の面で苦勞しているみたいですね。それでホームシックやノイローゼになって、せっかく素晴らしい実力や才能があってもそれを活かすことなく帰ってしまう若い人を見ると残念ですね。

★もっと市民交流の場を作ってみては

——ドイツのベルリンの壁のように、ヨーロッパも激動の時代に入りました。私感になりますが、日本は戦後45年、ずっとアメリカやヨーロッパに憧れ、欲しいものを全て手に入れてきたと思うんです。ですから今度は逆に日本が欧米諸国に対して、欲しているものを与えるべきじゃないかと。長い目で見えるようにして。

パウマン 私は日本人に対して一つ不思議に思っていることがあるんです。例えば不動産を持ったら美しい別荘の隣に工場を建てたりする。こんなことはヨーロッパでは絶対に考えられません。

ベレ ヨーロッパでは窓一つにしても気を使いますもの

ね。

パウマン そうそう。だからまだ余裕というか、精神面でのゆとりがない感じですね。もっと空間を上手く使うようにしたらいいと思いますよ。それと昼間醜い宣伝の看板が多すぎるのは何故でしょう。夜になるとキレイに見えるけど。

ベレ 多分、汚ない建物を看板で隠そうとしているんでしょうね。だから夜はネオンの光のせいかもしれないけれど、とてもキレイでロマンチック。車から見てもウットリする位(笑)。

パウマン でも少しずつ良くなりますよ。六甲アイランドにしても、印象は悪くないです。

ベレ 悪くない、悪くない。落ち着いてきましたね。だから小泉さんが先程言われたように、何事も特に建造物は長い目で見て、良いものを残していかないと、と思いますね。ポर्टアイランドにしても定着してきたのは10年位経ってからでしょ。将来を考えて、神戸も進んでい

ってほしいものです。

パウマン 全く同感です。21世紀に向けた街づくりを心懸けて下さい。

—— はい、頑張ります。それでは国際交流の視点から神戸はどうしたらいいか、アドバイスをお願いします。

パウマン 私が来日した7年前は、それこそ徳川鎖国でした(笑)。当時としてはそれが当たり前だったように思いますが、交流の「こ」の字もありませんでしたよ。日本でも比較的外国人が多く、国際色の濃かった神戸ですら、そんな有り様でした。その頃に比べたら、大分変わったと思います。

ベレ 神戸は、今再び脚光を浴びている旧外国人居留地があるし、外国人墓地もあるしで、横浜と並んでハイカラな港街というイメージがありますけど、それはあくまでシチュエーションに恵まれていたからだと思うのね。別に神戸が努力して、そういうイメージを作り出したというのではなく、もちろん全然何もしていないという気

は毛頭ありません。100年以上に亘って、山と海に南北を囲まれた自然環境を十分に活かすべく、試行錯誤を重ねてきていることはよく分かっています。ただ、もっと地理的に恵まれていない他都市に比べたら、もっと交流の場や機会があってもいいんじゃないかしら。

—— 5月に、市役所の西側に神戸国際コミュニティセンターが出来ました。

ベレ そのニュースは聞きました。ようやくという感じがですね。でも設備や書籍等も揃っているそうで、これから広く浸透していけばいいですね。

パウマン 外国人にとっても、ありがたい施設ですよ、情報も入るし。何と言っても市民や他の外国人たちとコミュニティでできる点がね。今までは、そんな場所がなかったですね。

—— ポートアイランドに神戸国際交流会館がありますけれど、会議等にしか利用できず、広い意味で市民や外国人の方が交流できる場ではなかったですからね。今後は

利用者も増えるでしょう。

パウマン 外国人も、市民と知り合いになりたいと思っ

ていますから、クリーンヒットですよ。

ベレ 神戸で初めてというのは意外ですね。

パウマン これからこれから(笑)。

ベレ そうですね。期待しましょう。

★互いの理解を深め、さらに素晴らしい神戸に

パウマン あとはベレさん何かご意見ありませんか。神戸は何をしたらいいのかわかるか。

ベレ うーん、そうですね。やっぱりお互いの理解を深めるということだと思いますよ。先程の語学マスターを第一として、次にどんどん広くいろいろな国の人と知り合って、ハートで意志を通じ合わせることが重要になってくると思うのね。まず趣味とか好きなものとかから始めてね。

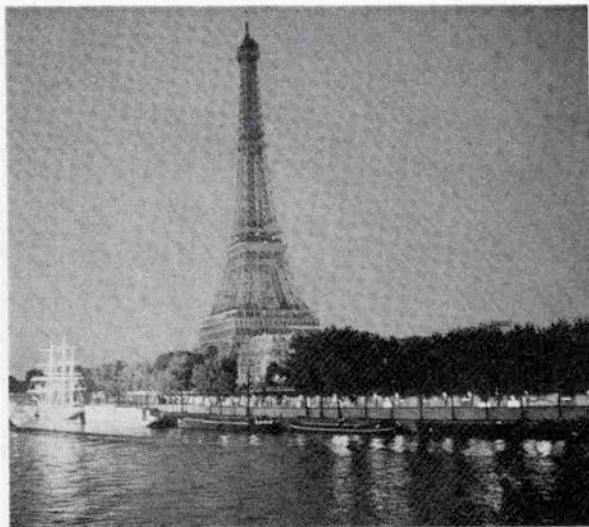
パウマン 最初から政治や経済について論議するのは無理だからね(笑)。まず身近な話から。それから徐々に。神戸市にしても、兵庫県にしても、他の都市の官庁に比べたら物事のわかりはいいし、対応も早いから、国際交流に関してはこれからかなり前向きな動きをすると思うし、「神戸っ子」が音頭をとって、どんどん働きかけていったらいいんじゃないかな。

ベレ マスコミの力は大きいですからね。映像でも活字でも。

パウマン それがやがては市民運動となるようなパワーを持つから。ヨーロッパでは、そういった一市民の声が声を呼び、国の流れを変えてしまうことはよくあることですよ。

ベレ 日本ではまだそこまで無理でしょうけど、市民一人一人が問題意識を持って、各人の意見を公にしていけば絶対に変わりますよ。

パウマン ドイツの壁にしても、一連の東欧問題にしてもそうですね。やっぱり市民あってこそその市であり、人あってこそその街なんだから。



セーヌ川からエッフェル塔をのぞむ



文化の宝庫ベルリン博物館

——本当に我々の役目は大きいと思っています。

ベレ 私もパウマンさんも縁あって神戸に来たんですから、好きな神戸があらゆる意味において、どんどん良くなってほしいと願っています。私の場合、領事館はここ大阪にあるけれど、自宅は神戸なんです。通勤に時間がかかるけれど神戸からは離れたくない。大阪には住みたくないですね。仕事をする分には、やはり東京や大阪の方が都合の良いところも多いんだけど、オフィシャルな部分とプライベートな部分は切り離しておきたいのよね。頑張ってるけれども神戸から通います(笑)。

パウマン 実に頼もしい(笑)。私も大阪には大阪の、東京には東京の良さがあるように、神戸には他の都市が絶対にマネすることができない特色をもっとアピールしていけばいいと思いますよ。せっかく「神戸っ子」という神戸を愛するタウン誌を発行されているんだから、各機関へ働きかけていったらどうですか。

ベレ そうよ。オピニオンリーダーになるべきよ。

——どうもありがとうございます。今日はお2人に神戸の国際交流についていろいろとお伺いする予定が、半分以上我々への励ましというか(笑)、貴重なご意見を頂いて恐縮しました。いずれにしてもお2人が我々以上に神戸という街を愛し、思っていて本当に嬉しく思います。

本日は長い間ありがとうございました。

(フランス総領事館にて)